

✓遊びと生活

私たちは普段、歩くために足を意識したり、騒音をひとつずつ聞き取ろうとはしたりはしない。すべて無意識のうちに行える。子どもはそれら様々な能力を獲得している最中なのである。私たちには一見無駄な行為に見えても、子どもには必要な行為なのだ。

子どもにとって自然遊びはとても大事である。まず、運動能力を鍛えることができる。スポーツでは特定の部位にしか筋肉がつかないのに対し、自然遊びでは全身を使う。また、遊び方の工夫や創造、自分の目標へ到達するために頭を使うことも当然必要となる。また、自分の身体能力に応じて挑戦できるかどうかを自分で判断しなくてはいけないことも大切なことだ。自分で目標を創造して、そこへ辿り着けるように意欲を持って取り組んだり再挑戦したりしようとするのに自然遊びはうってつけなのである。

また子どもたちが、その時に必要な能力を身につけたいと、自分から出てくる欲求を満たすことができる環境を作ってあげることが大切だ。

✓自然の素材と可能性

土や水、草花や枝といった自然素材は子どもの手でも扱いやすく、感性や想像力を育む最高のおもちゃなのだ。五感を使うことはもちろん、規則性のない物の上手な活用の仕方を工夫したり、用意された物ではなく「ありのまま」を受け入れたりしないと遊べない。また、時間の概念がまだ弱い子どもたちに、芽吹く、枯れるといった穏やかに時間の移り変わりを教えてくれる。

自然材を使った遊びから生まれる表現行為の可能性は実に多様だ。自然材が子どもたちの可能性を引き出し、子どもたちも自然材の特性を見出して遊びに活かす。また、自然材の組み合わせ、相互作用によって更に表現が広がっていく。保育者が自然材の特徴を理解しておき、子どもたちの欲求に応えられることが大切である。

✓園の自然環境が子どもたちへ与える影響

人口の施設が整った園環境と、自然が多い園環境を比べた場合、どちらが子どもにとってよい環境なのだろうか？ 病欠の多さ、集中力の散漫さ、衝動的…自然が多い園の方がこういった問題がはるかに少ないとの研究結果が出たのだ。また、子どもの身体能力においても自然環境が多い園の方が優れていることが分かった。もちろん、すべての結果においてではないのだが、多くの項目で自然の多い園環境の方が子どもたちにとってよいという結果が出ているのだ。

✓遊びとケガのリスク

子どもを活発に遊ばせたいという願いとケガに対する保護者への懸念はどこの園にでもある。「学びのリスク」と「ハザード」の違いをはっきりとさせておき、保護者に理解してもらうことこそ大切ではないだろうか。「学びのリスク」とは「健全な成長や、子ども自信の満足に欠かせない学びや挑戦する対象としてのリスク」のことであり「ハザード」とは「事故や怪我にしかならないリスク、また保育者が制御できない、子どもの過剰な挑戦など」のことを指す。園の環境を変えていくためには、まずこれを区別すること、また保護者に違いを理解してもらうことが必要になる。

また、ハインリッヒの法則（労働災害における経験則）によれば、「重大な事故 1：小さな事故 29：ヒヤッとした出来事 300」とある。ヒヤッとした 300 件を減らす改善をすれば小さな事故を防ぐことができ、小さな事故を防げれば重大な事故も防ぐことができるはずなのだ。日々の小さな危険にも注意を払う必要がある。

そのために保育者は今一度、設備の安全確認、子どもへの声かけ、適切な場所へ配置につくことなどの取

り組みすること。また、子どもたちもルール作りをしたり、自分の能力を判断できる力を育てたりすることが大切だ。多くの自然体験を持つ子どもたちは、自分たちの経験から危険のイメージも具体的に想像できるからだ。

✓園環境へのアプローチ

・土、砂場

土には土の、砂には砂の面白さがあるので、それぞれに工夫してほしい。また水を持ち込める環境も大切だ。砂場の囲いにも目を向けたい。囲いから落ちないように回って遊ぶ姿を目にしたこともあるだろう。囲いでさえバランス感覚を培える遊び場に子どもたちはしているのだ。

・水場

水遊びといっても、園によっては水たまりから川まで様々だろうが、水の流れる、落ちる、土を溶かすといった性質は変わらない。また他の素材と組み合わせることで表現方法も多様化しやすいのが水だ。

・菜園や花壇

植える→世話をする→収穫して食べる（鑑賞する）で終わるのではなく、そこから出たゴミを肥料にする→次に使うといった自然のサイクルを子どもたちが体験するとよい。また、子どもたちの目に付きやすいクラス前にプランターを設置する、収穫量が必要な場合は大きめの畑を用意するなど、目的に応じて設置できるとよい。

・草地や芝生

園庭の隅や、木の周りに草地を作ると、草木を遊びに使えたり虫たちを捕まえたりできる。虫の特性に合わせ、刈り込みの高さをまばらにしておいたり、子どもに注意すべき虫を伝えておいたりするとよい。また、面積の広い草地や芝生では、転んでも砂地よりは痛くない、お尻を着けて座っても汚れないなどの不安が解消され、動きが多様化する。

・飼育小屋

命の大切さ、愛着の心、思いやり、癒し、興味…。子どもたちが命を尊重できる存在だ。

・広場と遊具

広場があると運動量は活発化する。また、広場と遊具を行き来しながら遊ぶ傾向がよく見られ、活動範囲は遊具から5m以内に集中していることが多い。自分の範囲で遊ぶのに、大人がいいなと思うような大きな広場は子どもの遊びには特に必要ないのだ。

また、色々な遊びができる大型遊具より、鉄棒や滑り台といったシンプルな遊具の方が子どもたちも遊びに見通しを立てやすいのかもしれない。遊具をコの字、L字に配置することで広場と遊具を連続的に遊ぶことができる。

✓年齢、性別ごとの遊びの違いを把握し、環境を作る。

平均的に見ると、3歳は静的な遊び、4歳は動きや挑戦的要素を取り入れた遊び、5歳は挑戦から得た経験をもとに冒険的な遊びになることが多い。また、男児は虫取りや水遊びといった動的な遊びを、女児はままごとや木の実集めなどといった静的な遊びを楽しむ傾向の考慮し、動的な活動ができる環境ばかりではなく、ゆっくりと過ごすことができる環境も必要なのだ。

✓遊具の設置、遊ぶ際に考慮したいこと

子どもたちが自分で頭を使い遊ぶことができるように、また子どもどうしの関わりを促すことができる環境を作ることが大切だ。子どもたちが達成感や挑戦したいと思う要素を持てる環境作りも大切。

✓保護者が集う場所

保護者のために園庭を活用するのもいいと思う。保護者どうし、また時には保育者とも、子育ての悩みや情報を共有できるよう、椅子を設置したり縁側などがあれば活用してみたりしてもいいかもしれない。保護

者のソーシャルサポート（育児での努力を認めてもらう、ストレスの軽減、気持ちの一新）にも繋がる可能性もあり、保護者が園を理解してくれるきっかけにもなる。保護者と保育者の間で悩みの相談や助言できる機会が少なくなっていることが保護者の悩みだということにも留意しておくべきだ。